□随想□

彩倉会よ蘇れ

大西雄一〈エッセイスト〉

当今の世情アレコレのなかで、なんとなく昔のことを想いだしました。まあ聞いて下さいませ。

彩倉会、究々会ってご存知かな。知らないって。そうでしょうなあ、もう20年以上も昔の話、メンバーの多くも既に故人だもんなあ。

この会のメンバーは、県下のいわゆる文化人たち。年令・分野を問わず等しく同志の輩として、お互に談論風発、ワイワイガヤガヤ……実に賑やかで楽しいものでしたね。いつも30人前後は集っていたなあ。常連は、阪本勝、富田砕花、竹中郁、朝倉斯道、及川道夫、小倉敬二、木村真康、小林武雄、土井芳子、印部すえ子、眞野さよ、川口汐子、磯江朝子、初井しずゑ……等々の面々。

そや、ひとつタイムスリップして、ある日の集り、彩倉会を、ビデオで蘇らせてみますか。

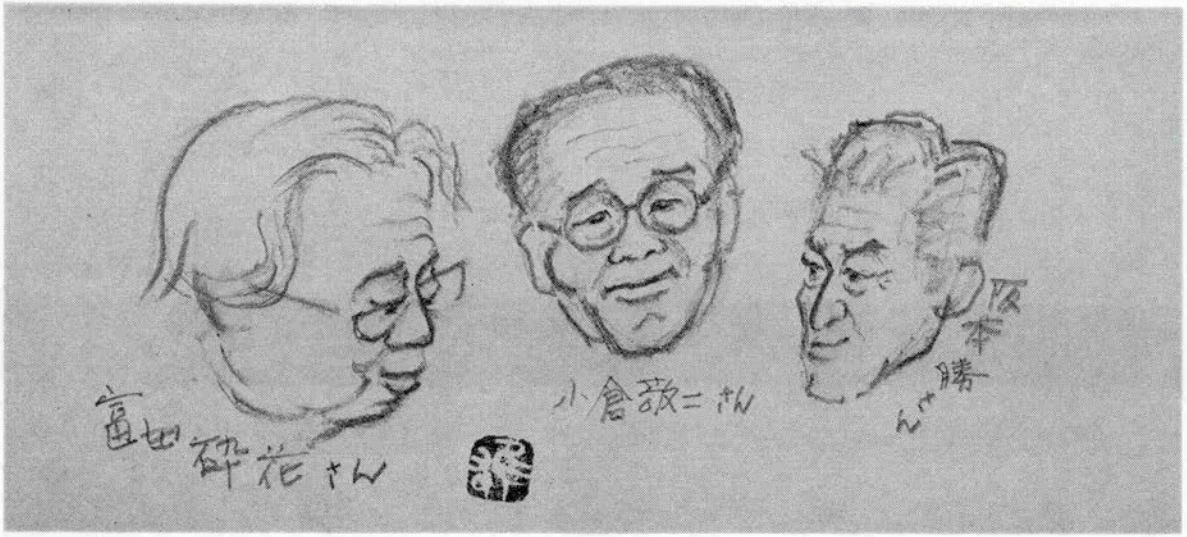
第一幕　彩倉会（さいくらかい）　各自持参の品々を前に、糶（せ）り市。せり人は阪本勝。捲じ鉢巻きで糶り台に突っ立ち、大声あげての迷調子――サアイクラ〳〵カイナハレ〳〵。いろんなものが出てきて、その都度爆笑洪笑が渦まく二時間余。

第二幕　食べくらべの場　各自持ちよりのご馳走―逸品、イカモノの類が、夫々説明講釈されるが……時に半畳冷やかしで賑やかなこと。

私の出品は、蛤蚧酒（ハマカイチュ）――とかげの現物そのものが、とぐろを巻いて大ガラス瓶の中に鎮座ましますが、極め付強壮精力酒。この中国広西省特産品、さぞ皆さん拍手と思いの外、余りのグロに辟易してか入札ゼロ。遂に会の名で砕花先生にご長寿を祈って進呈に、先生目を白黒、これ呑まんならんか。

これと今ひとつは、蝗（いなご）の佃煮。これまたグロに変りがない筈が、ワアと大歓迎。戦時中のお馴染さん、大切なカルシュム剤だったんだなあ。

第三幕　クイズ大会　まずは食後のデザート。各自迷案愚案を持ちよって騒々しい一刻。



こんな集りが、昭和20年代の末頃から、かれこれ20年余も続きました。県下の文化人たちが、何かと名目口実をつけて年に何回か会合し、行事し催しをしました。長老三、中堅五、若手二……というとこか。お互に敬意をもって認めあい、流石に節度は心得ているが、常に和気藹々、とても風格のあるムードでした。こうした交流は、やがてお互の理解を深め、地域文化の発展に寄与貢献したことでした。

それが、この年月、この種の集会がだんだん間遠になりました。長老級のご他界もさることながら、何よりも時世万般、当時とは大きく変化し、夫々の世代の感覚思考の断層、ズレが拡大のせいか。

であれば尚更に、当今のご時世であればこそ、あんな集りが—ごく自然な形、雰囲気のなかでの彼我の交流、理解が、とても大事な、必要なことではあるまいか。日常のアレコレのなかで、思うことの多い今日この頃でございます。

大西雄一さんの文と絵による「ぶらり旅日記」が神戸新聞総合出版センターから9月に出版されました。日本全国を旅して、いろいろな土地の自然と、そこに暮らす人たちの生きざまが描かれている興味深い本です。

〈筆者紹介〉
明治44年神戸に生まれる。神戸市局長を経て会社、団体等役員。神戸芸術文化会議常任委員、半どん会員。著書に「絵のある随筆」「話の歳時記」「ぶらりヒマラヤ」「六甲山ハイキング」などがある。

□トランペット片手にブラジル一人歩き〈29〉

カルナヴァルの日の出来事

絵と文　右近　雅夫〈在ブラジル・サンパウロ〉

それはカルナヴァルの連休の最後の日の事だった。朝のカフェを飲んでいると突然妹から電話がかかり、「昨夜から母が両眼に激痛を感じ失明しそうだ……。」と連絡があった。早速知り合いの眼科の医者二、三人の自宅に電話をしたが、生憎カルナヴァルの連休で旅行しており駄目だった。家内のマリアがサンタ・カーザ病院の院長の秘書のルシアと知り合いだったので、彼女の自宅に電話すると、「今日、自分は非番だけれど、今からすぐ病院に行って医者を探してあげるから連絡を待つように……」と親切に言ってくれた。お昼頃になってルシアから、「やっと医者が見つかったから、すぐ母を病院に連れて来るように……。」と連絡してきた。

ジャルディン・ダ・サゥーデ区の母の家に着いた頃から空がにわかに曇り出し、今にも大雨が降りそうになってきたので、僕は母をヴァリアンテのペルアの横に坐らせ、一緒に行ってくれる妹夫婦の来るのを待った。しばらくして妹夫婦の車が着くと同時に、バラバラと突然大粒の雨が降り出したので、僕は後をついて来いと合図して車をスタートさせた。ジャバクアラ大通りを横切ると雨は益々激しくなって来たが、僕は都心に出る高速道路に出て一刻も早く母を病院に連れて行かねばとあせった。ガソリン・スタンドの側で土管が破裂し、物凄い勢いで吹き出した水が行手を遮っている場所があったので僕は車をストップ。小降りになるまで待とうかと思ったが、しばらくして後からやって来た小型車が通り越して行ったので、そこから先へ行ったのが間違いだった。ジョゼー・マリア・ウィッタケル大通りのスラム街の近くに差しかかると、下水のマンホールの蓋が吹っ飛び二、三メートルもの高さに水柱が上り、どしゃ降りの雨と一緒に車に降りかかって来るのでこれは危いと気が付いた時、エンジンがストップしてしまった。広いアヴェニーダは濁流の川と化し、車道と歩道の見境さえわからなくなってしまった。車は水に浮んで流され始めたが、その時向うから徐行して来た大型トラックが立てた波で歩道の近くまで押し寄せられた。急に尻の辺りが冷たく感じたのでふと気が付くと、ドアーの隙間から入って来た水が坐席の処まで浸入して来ていた。

「ママイ、僕の首にぶらさがるんだ！」と言って扉を開け、車外に出ると、腰の辺りまで水につかりながら母を背負って岸までたどり着いた。車から水際までは僅か二メートル程だったが、激流に押し流されまいとアスファルトに足を踏ん張るようにして渡ったので、何キロもの距離を歩いたように感じた。そこは丁度スーパーの駐車場の前だったが、休日と大雨で人影はほとんどなかったが、裸に海水パンツを着けた若い男がやって来て手を差しのべてくれた。母をスーパーの軒下まで連れて行き、気が付くとあれほどひどかった降りも小やみになってきており、先の若い男と対岸にいたもう一人の海水パンツの太っちょの男が、二人で浸水した僕のヴァリアンテ車をスーパーの駐車場の方に押してきてくれた。雨が止むと大通の水もさっと引いてしまい、迂回して来た妹夫婦の車に母を乗せると、僕は車の処理のため、引き残った。

車の水をかい出していた二人の男に礼を言うと、「セニョールはずぶ濡れだし家族に知らせなきゃいけないだろうから、自分達の家に来て電話をしたらどうだ？」と言ってくれた。彼らの家はそこから横丁に入ってすぐ近くの質素な家だった。カルロスという太っちょの男がその家の主人らしく、僕はずぶ濡れのまま応接間に通された。「ジャポネースの旦那（セニョール）だ！」と彼は彼の奥さんらしい年配の女性にカフェを持ってこさせた。「とにかく、その濡れているシャツを脱がなきゃ……。」と彼は夫人にアルコールを持ってこさせるとタオルで僕の背中を拭い、彼のシャツを着替えに貸してくれた。夫人が、「体を暖めるのにコニャックでもいかが？」と勧めてくれたが、僕が断わるとしばらくして銀のお盆にシドレイラのお茶をのせて持ってきてくれた。やっと気を落ち着かせ辺りを見回すと、ゴタゴタした狭い応接間だが古めかしいピアノやギター等が置いてあるので誰が弾くのか！と尋ねると「ピアノは娘が弾くのだが、家族共昔風のジャズを聞くのが大好きだ……。」と言って、夫人はビックスのソロの入ったポール・ホワイトマン楽団の“Lonely Melody”の擦り減ったレコードを得意になって聞かせてくれた。その時、表に車の止まる音がして僕のアパートの六階に住んでいるドイツ人のフレディが家内の託した着替えの入ったバッグを持って迎えに来てくれた。僕はノルマという名の夫人に、「えらい災難だったが、お蔭で良きアミゴを得る事が出来た……。」と礼を言うと再会を約して別れた。

●兵庫県ハバロフスク地方友好使節団に参加して

アムール河（黒龍江）は、いまも流れる

小泉　美喜子〈本誌編集長・大和三喜子〉

ビロビジャン市の駅で

★白夜にアムール河は流れて

夏ハバロスクの街は、夜の十時頃まで明るい。

ホテルの窓からアムール河がゆったり流れ、少しはひんやりとした風が頬をなでる。いつも冷房になれきっている身には、自然の風の感触を楽しめる旅でもあった。「散歩に行こうか」と、大和三由紀さんと白夜の公園へ出かける。公園には、乳母車を押す家族づれや、若夫婦老夫婦、恋人たち、子供たち、そしてのびのび走るワン公たち。おしゃべりしたり唄ったりしての散歩。アムール河の水辺に行くと、若い女の子がさっさと服をぬいでビキニで泳いでいたり…。今、日本でこんなに家族同志のコミュニケーションなんてあるのかな。

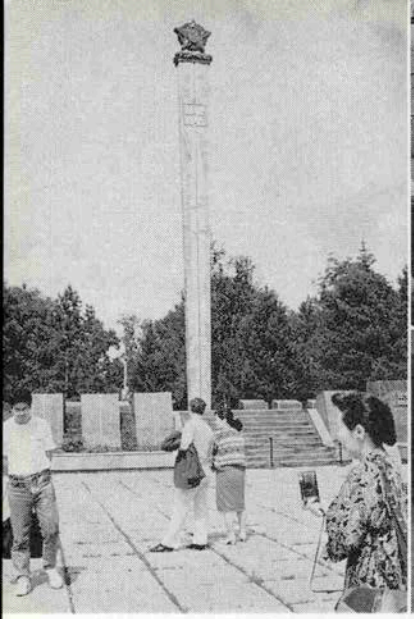
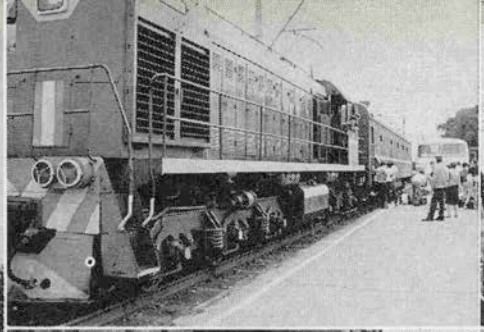
ハバロフスクの街は、戦後四十五年経ってあまり変っていないそうだけど、神戸の街はどんどん変る。変るスピードの早さが凄い。近代都市になりピカピカだ。人間だって、ことに女性は冷房病におびえている。すべてが便利。すべてがスピーディ。だけどすべてが高い。

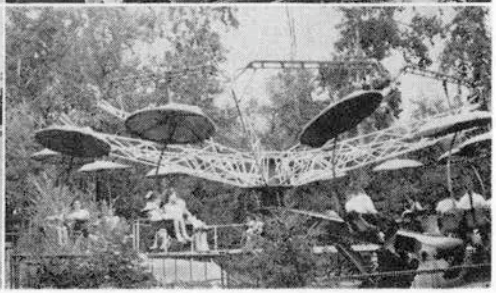
サラリーマンは、ほぼ一万円位の収入だから、街で日本人は目立つ買物はしないようと。ちなみに三十センチ角のばらの花飾りのバースディケーキが、百貨店で三〇〇円だった（外人専用のデューティフリーショップでは十倍になる）競争の原理で働く資本主義の豊かさと、革命後共産主義は七十年を経て、すべてが国営という別の意味でいえば、なんでも安く、いらいらしないで生き行けるという人間の幸せは、どっちもどっち。これは、これなりに欲を出さねばハッピーではないかとも思う。

ゴルビーのペレストロイカに惑っているといっていた議員さん。何でも中央政府にご相談しないとやっていけない時代から、地方でそれぞれがやれる時代になってやりやすくはなったそうだが、経済状態は品物不足。キャビアなどはヤミに流れるとかでまったく市内ではみられなかった。それにしてもこの身についたシステムからペレストロイカはえらいこっちゃ。一般庶民に行き渡るにはヒマがかかりそう―。

★ビロビジャンの劇場で握ったオムスビコロリン

兵庫県とハバロフスク地方の姉妹提携は、20周年という長い交流の歴史が、この91人という大型友好使節団の派遣につながり、「文化交流団」（花柳芳五三郎団長）も、前回は〝神戸中央合唱団〟がおもむき、今回は、日本の伝統芸能をぜひというソ連側の強い希望があったそうで、公演も街の人々は異文化を観る期待感が端々で感じられた。ハバロフスクのオペラ座では〝蝶々夫人〟の公演中とあって、出演者のプリマドンナを始め音楽家が、楽屋の衣装や着付けの見学と質問攻め。琴、三味線、太鼓の珍らしさと、舞踊家達がタカラズカのように何役も変化する大忙しの楽屋は驚異だったよう。



左は、ビロビジャンの第一次世界大戦戦没者慰霊塔。中上は重厚なシベリヤ鉄道に一輌借り切りで乗車。下中はハバロフスクのオペラ座でプリマと共に大和楽の面々の音楽交流。右上はアムール河めぐり。手前ナターシャ（通訳）と菊美津先生（琴）たち。白夜の公園で楽しむハバロフスクっ子。

舞台人は、劇場の良し悪しを〝楽屋〟から判断するクセがある。舞台、客席は、ビロビジャンも立派だったがハバロフスクはひどかった。ことにトイレ。日本なら楽屋風呂まできっちり揃っているのが、汚いトイレと、さくれ立った汚い舞台には閉口した。靴で出演するオペラ座だからドロドロ、そこを大掃除し、日本ならば桧の所作台で踊るところをタビで踊る。連獅子の毛振りや、おひこずりの姫は大変、ケガ人が出るあり様。

舞台転換には極東軍の若い兵士たちが十人位、助っ人に現われたのにはびっくり。さすがソ連と感嘆した。

黒麦のすっぱいパン食にも何とか馴れ、味もあっさりとしたハバロフスク料理だったが、楽屋では〝力〟がつかないとあって、おニギリづくりが好評だった。どう考えても、主食の米で日本人の底力が出る。唄も、三味線も、踊りも、大鼓も、皆大喜び。ソ連の人達が「食事がまずかったのか」と気にする。「そうとちゃうねん。これを食べんと〝力〟が出えへん」。

ビロビジャンは、ユダヤ人共和国で、フィラルモンコンサートホールは、外観のコンクリードのダイナミックさに比べ、多角的な内部構造の建築物。七〇〇人程の舞台と別に、一階に音楽ひろば、二階三階がレストランになっていて、音楽を聴き、食事が終ると踊る。七月十五日の公演の日は日曜日とあって、レストランで結婚披露宴が三組。ユダヤ教は土・日にしか結婚できないとあって、この国営ホールの会場は満員だった。ホールのロビーも素晴しく、ティールームもあって市民が楽しそう。一番驚いたのは、楽屋の窓から、牛が二頭のそりのそりと草を食べている。囲いも何もないんだから、のどかなもの。

公演を終えてハバロフスク地方の文化局長の女性から全員、レーニン像の入った表彰状をいただいた。舞台稽古のために墓参はかなわなかったが、ソ連との新時代を迎えた兵庫県人にとって、文化交流は、経済・行政と同レベルでトータルで行動することの大切さを身をもって体験させてもらった。

〈了〉

□神戸を愛する人々へ贈るメッセージ

ぶどう棚の陽ざしの中で

写真と文
稲田　勝己
〈FDB代表〉

（写真上）ロンドン郊外

いつもの鮨屋で、ある赤ひげの先生に会った。必ず木曜日の夕刻にお店に来られる。

いつものようにビールから。ビールは小瓶。先生が注文した。何故って、大瓶だと次に飲む時まで温度が上っているから。なる程、と思った。じゃ僕も小瓶ビールで。

「先生、今年は診療所のぶどうはいかがですか」

「みんな毎日、つがいで飛んで来るひよに食べさせたよ。ハハハッ」

「ええ、それはすばらしいですね」

先生の診療所の裏庭に、ぶどう棚がある。

春、まだ新芽の頃に、今年もぶどうがまたたくさんなるんだろうなと思いながら、そうしているうちにもう月日が経ってしまった。

ひよの夫婦にも毎日の楽しみがある。自由に空を飛び、またいつものようにこの診療所にあるぶどうを夫婦が話しながらつつくのだろう。

なんと仲のよい一日なのだろう。季節が過ぎ去り、そして秋の訪れるまで楽しみにひよは待ったのだろう。

診療所を開業されて40年。大勢の人たちの診察をされてきた。

僕も16年前、身体の調子が悪い時、TAXIの乗務員の人に話を聞き訪ねたのが始まりであった。その時、先生の会話が診察に来たおじいちゃんやおばあちゃんに

「どこが痛いの。今日はどうしたの。」

と大きな力のある声で話しかけている様子は、それだけでもう安心感があり、すっかりそれ以来お世話になっている。

それは笑顔なのかもしれない。
ひとことの励ましなのかもしれない。
ひとつの一輪の花なのかもしれない。
そして、脈をとる時のぬくもりなのかもしれない。

この間、センター街の家電店で、若い人に人気のある時計を娘が欲しいと言っていたのを思い出し、贈り物にそれを捜してプレゼントすることにした。

ウインドウを見ながら、多分このデザインなんだなあと考え、その時計を買うことにした。

「贈り物です。よろしく」

と言って求め、新幹線の中で袋をのぞいてみた。リボンがかかり、何なんだろうと娘が喜ぶ笑顔を思い浮かべながら。

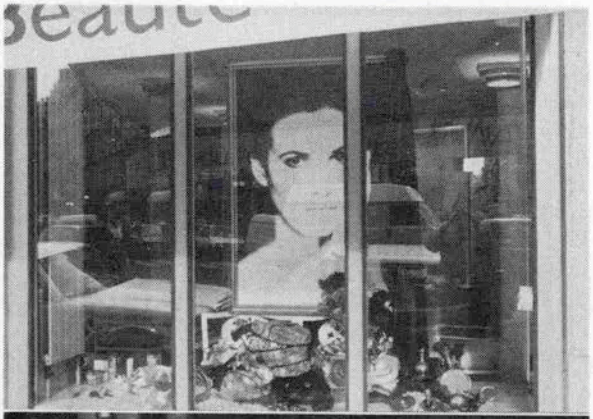
でもその時、一瞬にしてエッと思った。包装なしにそのまま袋にポンであった。

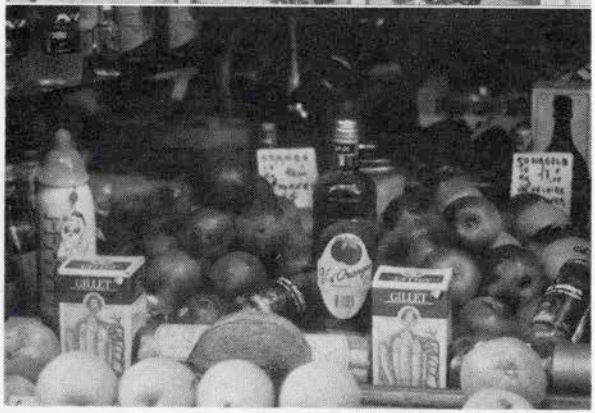
それから色々考えながら、小さな贈り物でも心を込めて包むことこそ、真心を伝えたりメッセージになったりその店の形なのかなと思った。

神戸に訪れる観光客もこれから大勢来る。また毎日の生活の中にもそれぞれの生活風景がある。どんな立場であっても、決して人のぬくもりを忘れない神戸の街であってほしい。

赤ひげ先生の計画は、まだ開発がされていないこの街に地域の人が本当の安心感を与える新しい病院を建築することだと聞いた。

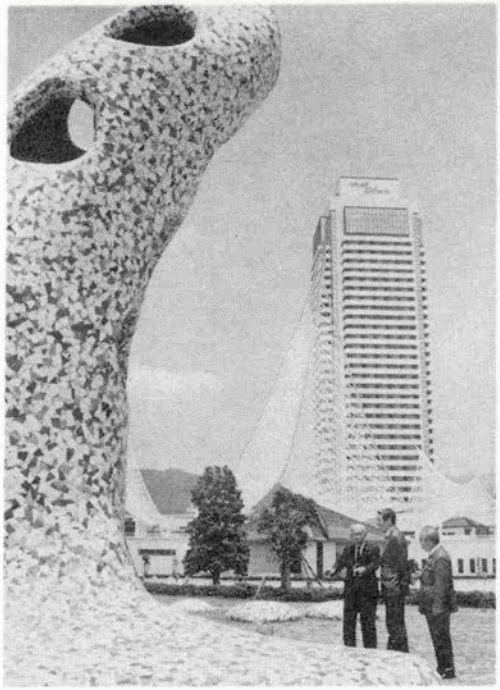
都心部だけでなく、周辺整備の環境も是非行政が行われることを願っている。





パリのウインドウ

■いなだかつみ
（F・D・B代表者、プロデューサー）1950年生れ。大阪市立第二工芸図案科卒業。EXPO・'70、京都駅前再開発、その他、商業施設プランを手がけ、79年にF・D・Bを設立。
OFFICE ☎392—0461㈹



◀メリケンパークにつくられた"ファッション都市神戸"のモニュメント

●特集●

THE KOBE FASHION'90

□神戸ファッションフェスティバル

- KOBE ファッションパーティ'90
- HELMUT LANG '91春夏コレクション
- 6人のニュークリエイターと
  ペーター佐藤＋伊藤タケシ

□神戸ファッション協会

神戸市がファッション都市を宣言して20年近くになろうとしている。この間、ファッション関連産業の進長がめざましく、神戸発のファッションが全国へと発信されている。また昨年のWFF89（ワールド・ファッション・フェア）では、ファッション都市・神戸の核とも言えるポートアイランドのファッションタウンの街開きイベントが盛大に催された。

今秋も神戸ではファッション・イベントが華やかに開催される。一方では、神戸ファッション協会の結成へ向けて積極的な動きも見られる。神戸ファッションの最新の話題を集めてみた。

今年のテーマは〝ウィーン〟

ファッション主導型都市、神戸の誕生に向け、神戸で創造した新鮮な情報を全国へ。「第2回ファッションフェスティバル（KFF）」は十一月中旬、ポートアイランドのアシックスアトリウムを会場に開催される。今回のテーマは「ウィーン…世紀末への旅」。十九世紀末、華麗な色彩で芸術の花を咲かせたウィーン文化。一九八九年、ベルリンの壁が崩壊し、東欧に民主化の波が押し寄せる中、永世中立国であるオーストリアは西欧と東欧との橋渡し役として注目を集

めている。かつて、チェコスロバキアまで約60㎞、ハンガリーまで約200㎞、東欧への玄関口であるプラハの春を甦らせたのは〝チェコフィル〟と〝ウィーンフィル〟が奏でるハーモニーだったとも言われている。その東欧の改革に少なからず影響を及ぼしたウィーンの芸術家やデザイナー達。

同フェスティバルは、90年代のファッショントレンドの先駆け的存在である〝ウィーン〟を全体テーマとし、昨年、パリコレクション世界デザイナーランキング第4位に名乗りをあげたウィーンの天才デザイナー、ヘルムト・ラングのコレクション、そして第一回に引き続き、日本の若手デザイナーの育成を目的とした神戸オリジナルファッションコレクションを展開。十一月十六日にポートピアホテルで開かれる前夜祭、KOBEファッションパーティ'90「ウィンナーワルツの夕べ」で開幕する。

□第2回神戸ファッションフェスティバルスケジュール

★KFF前夜祭—協賛イベント—KOBEファッションパーティ'90「ウィンナーワルツの夕べ」

日時　11月16日(金)　19：00〜

会場　神戸ポートピアホテル「大輪田の間」(ポートアイランド内)

主催　神戸ファッションパーティ実行委員会

後援　神戸ファッションフェスティバル実行委員会

★HELMUT LANG（ヘルムト ラング）'91春夏コレクション

日時　11月17日(土)第1回16：00
　　第2回18：00

会場　アシックスアトリウム

入場料　5000円

主催　神戸ファッションフェスティバル実行委員会

後援　オーストリア大使館

協賛　トーアレディース、アシックス

★'91春夏コレクション6人のニュークリエイターとベーター佐藤＋伊東タケシ

日時　11月18日(日)第1回14：00
　　第2回17：00

会場　アシックスアトリウム

入場料　5000円

主催　神戸ファッションフェスティバル実行委員会

協賛　アシックス、アバン、イズム、ヴァレン、オールスタイル、ジャヴァ、ワールド

■問い合わせ

神戸ファッションフェスティバル（KFF）実行委員会事務局
☎078—322—5326
5323（直通）

▶昨年は〝スペイン〟をテーマに華麗なショーが展開された。

HELMUT LANG '91春夏コレクション

1992年のEC統合を前に、急激に変化するオーストリアファッション界。その旗手であるラングのコレクションが神戸に最もトレンディな風を吹き込む。

■HELMUT LANG氏のプロフィール

1956年、ウィーンに生まれる。ハンガリー、スロバニア系の母とスラブ、ロシア系の父の血を受け継ぎ、アルプス国境周辺で育つ。山中での簡素な生活を通じて背景にある異った国々の文化を吸収し、彼の無比な人生を形成していく。

勉学のためにウィーンに戻った彼は、ワイネル・モダンアカデミーに意欲的に参加し、知識人、芸術家など様々な希有な個性を持った人々と出会う。彼らに援助されながら1979年、オリジナルデザインの創造にとり組み始める。ラングのスタイルは、個人主義のもとで彼自身の趣向の中に様々な国々の要素が影響しあって合成されたものであり、知的・文化的ハイレベルの曖昧さ、自然指向のモダニズムが混在している。彼は〈ベーシック〉の新しい定義と〈感性〉の上昇、下降、傾向およびその内向性、外向性の独自の解釈に日夜没頭している。

1986年、初めてパリコレクションに参加。1989年、パリコレクションにて世界デザイナーランキング第4位となる。

日時　11月17日(土)16：00～／18：00～
会場　アシックアトリウム
協賛　トーアレディース、アシックス
入場料　5、000円

ラングのコレクションは、神戸の町に最もトレンディな風を吹き込もうとしている。

'91春夏コレクション6人のニュークリエイターとペーター佐藤＋伊東タケシ

文化ファッションの情報発信基地を目指す神戸で、新しい才能の発掘と育成、そして新たな〝神戸ファッション〟の定着を求めて神戸を代表するアパレル企業の中心的存在として活躍している新進デザイナー6名によるコレクションが発表される。今回は、〝音楽と芸術の都〟ウィーンをテーマに、伊東順二氏（美術評論家）監修のもと、アート＝ペーター佐藤氏（イラストレーター）、音楽＝伊東タケシ氏（ミュージシャン）と、現在の日本を代表する各スタッフがファッションとの融合をはかり、ミックス・メディア・コレクションという形でオリジナルショーを展開する。

■6人のニュークリエイターのプロフィール

岩田　明

昭和27年4月、大分県日田市生まれ。昭和55年に渡仏、ジバンシ

竹内　千春さん

岩田　明さん

辻内　恵子さん

梶野加恵さん

★ニュークリエイターの活躍に期待したい

――畑崎廣敏ワールド社長に聞く

昨年のＷＦＦ89では、神戸は〝スペイン〟をテーマにファッションを展開しましたが、今年は〝ウィーン〟。昨年同様、神戸らしい特徴が出せるようにもっていきたいですね。

大事なことは、〝さすがは神戸〟と言われる内容にすること。スケールを追うよりも、神戸らしい〝味〟の出たものをやることです。

その意味で、地元のニュークリエイターの登場は、昨年に引き続いて意義のあることです。

これによって、地元のクリエイターの〝売り出し〟が定着し、神戸でいい仕事をやれば、売り出せるチャンスをつかめる、あるいはチャンスをつかむために神戸で頑張るということになって欲しい。

昨年、ニュークリエイターに選ばれた人たちは、その後も自信をもって生き生きと仕事をしています。これに刺激されて、クリエイターの輪がどんどんと広がって行けば素晴しいと思います。

チャンスは毎年やって来る――継続して行くことが大切です。

20年近く前、神戸はファッション都市を宣言しましたが、今やいくつの都市がファッション都市を標榜している。これからは、その中でも〝さすがに神戸は違う〟というところをアピールしていかないといけません。

そのためにも、まず官民一体となってＫＦＦを成功させようではありませんか。

ー、ギ・ラロッシュ勤務を経て、昭和63年9月、㈱アバン入社。現在同社ブランド「ヴォートル」のチーフデザイナーとして活躍中。明石市在住。

梶野和恵

昭和25年11月、島根県八束郡生まれ。昭和54年9月、㈱ヴァレン入社。現在、同社ブランド「フォルブリンゲン」のチーフデザイナーとして活躍中。芦屋市在住。

竹内千香

昭和36年11月、愛知県名古屋市生まれ。昭和58年4月、ジャヴァグループ㈱ロートレアモン入社。現在、同社ブランド「ロートレアモン」のリーダーとして活躍中。神戸市在住。

辻内恵子

昭和31年4月、兵庫県神戸市生まれ。昭和53年4月、オールスタイル㈱入社。現在、同社ブランド「エルジェンヌ」のチーフデザイナーとして活躍中。神戸市在住。

泊　三枝子

昭和30年1月、鹿児島県奄美大島生まれ。昭和56年2月、㈱イズム創業時から同社に参画。現在、イズムグループ㈱バイオ事業部のチーフデザイナーとして活躍中。神戸市在住。

山下博子

昭和35年9月、兵庫県姫路市生

泊　三枝子さん

山下　博子さん

まれ。昭和56年4月㈱ワールド入社。現在、同社ブランド「スチュッソ」のデザイナーとして活躍中。姫路市在住。

■**ペーター佐藤氏のプロフィール**

昭和20年、神奈川県生まれ。昭和42年、東京アド・デザイナーズ入社。昭和45年、東京キッドブラザーズのニューヨーク公演に俳優兼ビジュアル担当として参加。帰国後、フリーランスのイラストレーターに。昭和62年、画集「POR TFORIO」を発刊。「日本グラフィック展年間作家賞」を受賞。

■**伊東タケシ氏のプロフィール**

昭和29年、福岡県生まれ。日本大学芸術学部退学後、数々のコンテストで賞を獲得。この頃、安藤まさひろ氏と出会い、ザ・スクエア(現Tスクエア)のステージにゲスト出演。昭和53年、それを機にレギュラーメンバーとなりプロデビュー。以降、Tスクエアの顔として安藤氏とともに活躍してきた唯一のオリジナルメンバーである。

日時 11月18日(日)15：00～／17：00～
会場 アシックスアトリウム
協賛 アシックス、アバン、イズム、ヴァレン、オールスタイル、ジャヴァ、ワールド
協力 ㈱NEST(S・D・N)東洋美術学校(DAI・MEDIA)
入場料 5、000円

ペーター佐藤さん

伊東タケシさん

KFF前夜祭は〝オーパンバル〟の雰囲気で

神戸ファッションフェスティバル(KFF)の前夜祭として行われる「KOBEファッションパーティ'90」。今回は、KFFのテーマである〝ウィーン〟に合わせ、タイトルは「ウィンナーワルツの夕べ」。

ファッションパーティは、'87年'89年にも開かれているが、回毎に〝パーティ慣れ〟が増えている。よりファッショナブルなハートをもって、よりファッショナブルなウェアを着て遊ぶ——ファッションパーティは、参加者が自分で一番おシャレだと思う服を着て歓談を楽しむというファッション都市にふさわしいステージである。

さて今年の趣向はというと、音楽と舞踏会の世界的な都であるウィーンの優雅さを演出するために会場には、ウィーンの大舞踏会〝オーパンバル〟の雰囲気を感じさせる装飾が施される。

総合プロデューサーは、美術評論家で、ぴあ総合研究所顧問、NHK衛星放送アート担当でもある伊東順二氏。また、メインゲストには作曲家の三枝成彰氏を招き、氏の語りとオリジナル原楽器による演奏が予定されている。

またKFA(神戸ファッションアソシエーション)KFT(神戸ファッションタウン協議会)のメンバー企業の社員選抜によるウィンナワルツの披露、さらに一般参加者も含めて会場全体にワルツの輪が広がって行く。

◀昨年のファッションパーティから

他にはカジノコーナーでゲームを楽しんだり、また特賞「パリ8日間の旅」ペア招待など豪華賞品が250本用意された抽選会など、お楽しみも十分にある。

会員券は、10月11日からKFA内神戸ファッションパーティ実行委員会(電話302－6849)で発売する。

日時 11月16日(金) 19：00～
会場 神戸ポートピアホテル「大輪田の間」
入場料 13、000円

神戸ファッション協会の設立をめざす

――木口　衛氏に聞く

神戸市内のファッション業界を中核に周辺の関連産業を幅広く網羅し、神戸のファッション都市づくりの推進を目指す「神戸ファッション協会」の設立が具体化に向け動き出した。本誌では、その背景や動向について、木口衛さんからお話をうかがった。

（神戸商工会議所ファッション都市づくり特別委員会委員長）

ご存知の通り、神戸は食品、アパレル、酒、家具など各業界が全国的にも際立った活躍をしております。グルメの分野では上島珈琲の上島達司社長が食品業界の牽引役を担っていることに代表されるように、どの業界にも秀れたリーダーが揃っています。他都市に対してウケのいい仕事が出来るのはそのことが大きく関係しているのではないでしょうか。また、神戸は今までにファッション、スポーツ、グルメの各都市宣言を行い、大きなピーアールの成果をあげてきました。

このような状況に対し、他都市で「神戸は変わってるな」と、よく奇異の目で見られるのですが、裏返してトータルファッションという観点からすれば、先見の明があったのだと思います。

ところが、そのトータルファッションの提唱者である筈の神戸には、様々な業種を網羅した協会がありません。KFFのようなイベントのごとには協会が結成されるのですが、終われば解散してしまうということが繰り返されてきました。これではファッション都市づくりの推進に支障をきたす上に、業界の発言力も弱くなってしまうと思い、また神戸の発展のためにも協会の設立に向かって動き始めたわけです。

広い意味でのファッション産業の結束を図るための協会ですからアパレルだけでなく、食品、ケミカルシューズ、真珠、家具など三十近くの団体に参加を呼びかけています。現在はまだ総論賛成というところですので、これから具体的な内容を詰める段階に入っています。来年の春に発足の予定ですから、これからが正念場というところですよ。

発足後は、ファッション都市づくりの推進を目指して調査・研究、人材の育成・交流に力を入れていくつもりです。

街の特性を最大限に活かしながら、トータルファッションの提唱者である神戸にふさわしい協会にしたいですね。

●そごう'90秋冬イタリアコレクションフロアショー
☆10月20日（土）13：00〜15：00
会場　そごう神戸店本館４階プレタポルテサロン北エスカレーター前
トラサルディ、ミラショーン、ランチェッティなどイタリアの歴史と伝統が磨きあげた一流の品々を通してイタリアならではの上質の生活を提案します。

●KFS マンスリーサロン、ファッション公開講座
☆10月30日（火）18：30〜20：30
会　場　関西信用金庫本店８Ｆ、かんしんホール
入場料　2,500円
ファッションコーディネーターの立亀長三氏を講師に迎え、ヨーロッパ、アメリカの最新ファッション情報を話して頂きます。

●神戸ファッションデザインコンテスト＆神戸ファッションクリエイターズ・ファッションショー
☆11月14日（水）
会　場　田崎ホール・エスパメディア
入場料　無料・要申込　問い合わせ221—4121
主　催　神戸市、神戸商工会議所、神戸新聞社

辻内恵子
1956年、兵庫県生まれ。現在、エルジェンヌブランドのチーフデザイナー

泊三枝子
1955年、鹿児島県生まれ現在、イズムグループ㈱バイオ事業部チーフデザイナー。

山下博子
1960年、兵庫県生まれ。現在、スチェッソブランドのデザイナー。

ヘルムト・ラングプロフィール
1956年、オーストリアのウィーン生まれ。1979年、クチュール&アリエをオープン。1989年、パリコレクションでデザイナーランキング世界4位

ペーター佐藤プロフィール
1945年生まれ。東京アドデザイナーズを経て、1971年、イラストレーターとして独立。86年にペーターズ・ショップ・アンド・ギャラリーを開く。

株式会社　ワールド
代表取締役社長　畑崎　廣敏
神戸市中央区港島中町６丁目８—１
ＴＥＬ（078）302—3111

マドンナグループ
代表取締役社長　清水　善之
神戸市中央区小野柄通６丁目１—９
ＴＥＬ（078）251—6761

K・F・M
会長　藤本　ハルミ
神戸市中央区山本通２丁目13
クチュールマーガレット
ＴＥＬ（078）242—5690

婦人帽子
マキシン
代表取締役社長　渡辺　浩康
神戸市中央区北長狭通２丁目６—13
ＴＥＬ（078）331—6711

株式会社　山勝真珠
代表取締役　山本　泉
神戸市中央区山本通２丁目５—３
ＴＥＬ（078）231—0051

株式会社神港ドレス
代表取締役　荒津正美
神戸市灘区大和町３丁目１—13
ＴＥＬ（078）851—0035

パリーシューズ工業所
代表者　清谷泰夫
神戸市長田区細田町３丁目１—20
ＴＥＬ（078）691—2741

株式会社　シャルドン
代表取締役　大久保　静江
神戸市中央区琴ノ緒町４丁目10—６
ＴＥＬ（078）222—7410
ＦＡＸ（078）222—7267

<順不同>

アトリエ・トキコ

代表 高橋 泉

西宮市塩瀬町名塩1047
TEL (0797) 61—0137

クチュール アトリエ
An Akemi
石原暁美

芦屋市大桝町1—15
TEL (0797) 31—1790

モードメイトミチコ

服飾デザイナー 主宰 藤井 美智子

神戸市東灘区本山北町5丁目13—11
TEL (078) 431—8051

学校法人 田中千代学園
田中千代服飾専門学校

理事長 学校長 田中千代

芦屋市大原町21—15
TEL (0797) 31—0601㈹
FAX (0797) 22—1548

伊東タケシプロフィール
1954年、福岡県生まれ。1978年「ラッキーサマー・レディ」でプロデビューを飾る。以降11年間、Tスクエアのオリジナルメンバーとして活躍中。

●神戸ファッションフェスティバル
11月16日（金）～11月18日（日）
☆11月16日19：00 KFF 前夜祭
KOBE ファッションパーティー'90
＜ウインナーワルツの夕べ＞
会 場 神戸ポートピアホテル＜大輪田の間＞
主 催 神戸ファッションパーティー実行委員会
◆一般公募にて抽選でご招待
☆11月17日（土）16：00／18：00
HELMUT LANG '91春夏コレクション
会 場 アシックスアトリウム
協 賛 トーアレディース、アシックス
入場料 5,000円
☆11月18日（日）15：00／17：00
'91春夏コレクション6人のクリエイターとペーター佐藤＋伊東タケシ
会 場 アシックスアトリウム
協 賛 アシックス、アバン、イズム、ヴァレン、オールスタイル、ジャヴア、ワールド
入場料 5,000円

岩田 明
1952年、大分県生まれ。1988年、㈱アバン入社。現在、ヴォートルブランドのチーフデザナー。

梶野加惠
1950年、島根県生まれ。1979年、㈱ヴァレン入社フォルブリンゲンブランドのチーフデザイナー。

竹内千香
1961年、愛知県生まれ。現在、ロートレアモンブランドのリーダー。

学校法人 横田学園
神戸服装専門学校

学校長 米谷玲子

神戸市灘区永手町2丁目3—17
TEL (078) 851—3947

学校法人 福冨学園
神戸文化短期大学
神戸ファッション専門学校

学長 校長 福冨芳美

神戸市中央区国香通6丁目7
TEL (078) 241—8611

株式会社
メンズハウスグループ

代表取締役 中村元明

神戸市中央区三宮町1丁目8—1—116
TEL (078) 331—3915

株式会社フタハト

取締役社長 赤崎孝嗣

神戸市長田区西尻池町1丁目3—26
TEL (078) 611—3811

グルメ対談●特集

日本料理のルネッサンスは神戸から。

奥村 彪生氏　料理家

10月12日から11月30日まで、神戸商工会議所主催の「グルメディアKOBE'90」が開催される。これは、〝グルメ都市・神戸〟を神戸内外に喧伝するためのイベントで、昨年の春秋に引き約いて三回目の催し。これに因んで〝食〟に造詣の深いお二人に縦横に語っていただいた。

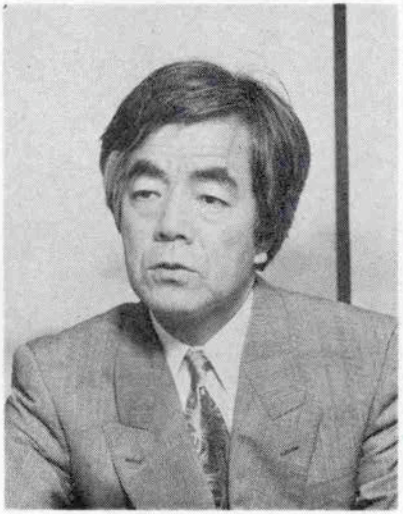
★神戸は日本のフィレンツェ？日本の料理のルネッサンスは神戸から。

奥村　神戸は瀬戸内海性の気候帯。地球規模で考えると地中海性気候というのではないか。六甲おろしと瀬戸内海の風で空気が澄んでいるのではないでしょうか。住んでいる人も気質的に明るく、ファッショナブルですね。そして明治以降神戸ビーフの生産を続けて来た。米も野菜もできる。素材が豊富で未来への食についても強いでしょう。そして神戸には京都、奈良のような伝統がないから非常に進取的です。その意味でも、これから日本の食文化の発信地になって欲しい。特に神戸ではファッション性のある料理が生まれやすいのではないでしょうか。イタリアでいうとフィレンツェのような、ルネッサンスの発祥地でフランス料理の起源でもある。日本の料理のルネッサンスは神戸からおこるのではないかと思う。ですから神戸の料理人も食べる人も幸わせですよ。

鈴木　神戸は明治の開港以降、近代都市として発展して来た。それまで全く片田舎でしたね。古い因習やしがらみがない。そして世界のいろいろな文化をどんどんとりよせる横浜と並んで海外への窓口になっていますね。つまり明治以降、日本が西欧化、近代化に邁進していた当時、神戸はまさにチャンピオンだったわけです。そういう点では、京都、奈良のように一方では古い、良き伝統を守っていかなければならない役割、それもいい面とそうでない点があるんですが、神戸はそういう点からいうと積極的に新しい文化をとりこむという役割を明治以降果してきた、食文化もそういう意味合いでおもしろい場

グルメディア●KOBE '90

灘の本吟醸酒は冷やでぜひ…。



神戸大学教授　鈴木 正幸氏

所柄ではないかと思う。これから本当に味覚文化を考えていく時、神戸には、もっともっと新しいものやアイディアを出しながらそれを形づくっていく役割が残っていると思いまね。

奥村　世界で一番味覚の幅をもっているのは日本人。今日はカレー、今日はギョウザ、今日はカツレツ、そんな中でもたまには、メキシコ風のものを食べる。また東南アジアのものもある、酢っぱいものもあれば辛いものもある、味覚の幅が広い。

鈴木　異なった感性、異なった文化の境界を日本は超えてしまうんですね。スパイスのすごいものも自分のものにしてしまう。美的感性にも優れていますが、明治時代には西欧音楽もとり入れる。西欧7音階を自分のものにしてしまう、あの能力が味覚文化に出ていると思います。

奥村　奈良時代は朝鮮半島と内陸、室町のころは中国、安土のころは初めてヨーロッとの接触、江戸に入るとオランダ、たえず外国との接触している。需要する、選択する、それを洗練する。要するに都合のよいように和風化する、消化させる。私達のいう日本料理、テンプラ、寿司、すき焼きにしても、外来のものが日本ナイズ、日本化されたものです。で、もちろんヨーロッパから中国から入ってきたものも西洋料理や中国料理と称するのですが、どこか違う。洗練させていくということに良さがあったのではないかと思います。

鈴木　フランス料理もそのままでなくて、盛りつけにも日本人の美的感性がある。日本の料理人がフランスでがんばっているとききますが、これが器にしても盛りつけにしても日本的美的感性をフランス料理の中にもりこんでいる。これがフランス料理の良さをさらに極立たせている。これは手先の器用さなんかも関係していると思います。

★水槽の中で鯛の刺身が泳いでいる?

奥村　日本の場合、四季のうつろいのメリハリがはっきりしている。色が多い。自然の中で身に備わったものが

神々の食事（生田神社会館料理部）

盛りつけの中に入っている。

鈴木　ただ心配なのは、今は年中何でもあるので、おいしいものを食べるということがなくなりつつある。四季折々に旬のおいしいものを食べるという感性がなくなる、味に関する微妙なセンスがだんだんとなくなってくるのが心配ですね。

奥村　鮮度優先になっていますね。もちろんそれも大事なんですが、それが一番おいしい時に干物にするとか、日本ほど冷凍に素晴らしい技術が発達した国はないですね。なぜそうかというと、冷凍にして、もどしたら刺身にして食べられるという刺身文化というのがある。ドイツへ日本料理を紹介に行った時ですが、日本での魚場の生けしめの話をしたら彼らは理解できない。

鈴木　そうですか。するとたとえば大きな水槽で生かしている活魚も苦しい環境の中で生きているのであって、目の前で引き上げて切るというのも邪道ではないかと思います。

奥村　まさにその通りで、ひとつは日本人は全て情報でものを食べているからで、〝しかけ〟にはまっているんです。泳いでいるのが旨い。それは鮮魚に対する憧れがあるんです。鯛がいた、するとそれをみると刺身が泳いでいるようにみえる。すくってその場で刺身にしてもうまいことはない。ショー的要素が強いんです。もちろん料理にはファッション性が伴わなくてはいけませんが私の考えるファッション性というものはみせるだけ、飾るだけではない。神戸がファッション都市宣言をするときに尽力された神戸新聞社の故・畑専一郎さんが、一メートルの生地がある、それを裁ち、縫い、そしてそれを着る人も観る人も楽しむ。これがファッションの原点だとおっしゃっておられた。料理だって同じです。一匹の鯛をどうさばき、料理するか、原点を見極めてみないと。ただマスコミに踊らされているのではだめですね。

鈴木　それはつまり先程〝旬〟を大切にといったのと同じように、自然体を大事にしないとだめですね。

奥村　神戸ではかつてなかったことですが、飾りたての料理が多くなったように思います。

鈴木　それはちょっと心配ですね。

奥村　これは京都の料理の影響があるのでは。平安時代から〝すえくご〟と〝めしくご〟があります。〝すえくご〟は飾りたてるだけで食べない料理。〝めしくご〟は食べる料理。京都は海が遠いから野菜、果物、干物などしかない、そういうものは見せなきゃいけない。それで細工をしたんです。そして時には天上人の前で魚を切

る、ああいう形へ形へと流れて育ってきたのが今の京料理で、ショー的な要素が多分にあります。それがだんだん神戸も影響をうけてきた。もう少しいいファッション性をもっていたんですが、中身よりも外観だけが喜こばれている。

——日本料理は吉兆さんが有名ですが、何かキラッとするシャープなものをもっていますね。

奥村　吉兆の湯木さんは日本で一番新しいことをする人です。スモークドサーモン、イクラ、フォアグラ、それらをすーっと使い、しかもそれが神戸ナイズされています。神戸で育った土壌というか、感性、知性は幼少年期に培われたものです。そういうものが宿っていたからこそできたんです。

鈴木　そういう点からいうと、僕は専門が教育学ですが感性というものは右脳が支配しているんです。これは幼少年期に感性を豊かにしなくてはいけないのに、今の受験体制ではできません。日本人のもっている味覚とか美的感性のよさがなくなってしまう。一流の料亭でも先代はでっち小僧から始めたが、次の代は塾漬けになっています。だから名前だけ一流でも中身はダメになっているところが多いのではないかと。そこで働いている人達が独立して小さな店ができるというと、それは素敵ですね。日本の今の学校教育のあり方というのは、日本人のもっている味覚センスのすばらしさを犠牲にしていると思います。そういうものを大切にするという考え方を親も学校も見直さないといけないと思います。

奥村　だいたい料理でいうと、14〜15才くらいでこの道に入るといいですね。

鈴木　六甲に若いカップル、30才のマスターと奥さんがフランス料理の小さい店を出しているところがあるのですが、彼は高校の時からフランス料理をやりたいと言っていました。でも兄弟も大学へ行っているし親も行かせたいと。しかし本人が修業したいというので納得して宝塚ホテルで10年修業して独立したんです。味づくりに真剣に取り組んでいる。料理に限らず、その子のもっている良さを認めていくという姿勢、それは昨今仲々ないですね。今はなんでも学業成績で評価しますからね。

★ドイツのホテル学校で生徒の肩をポンとたたくと…。

奥村　フランスとかドイツ、とくにドイツではギルトがあって、職人意識というのが強いですね。

鈴木　日本でもシェフの位置づけをきちっとしないといけないと思いますね。

奥村　今、フランスでは昔の伝統ある料理がつくれなくなっています。ソースもつくれない。それではいけないということで料理人協会という組織が大学を作ったんです。若い人に対する料理指導を、シェフ達、長老達が交替でやるんです。

——民博の石毛直道先生が神戸に料理の学校をつくってはどうかと、以前から提案されていますね。

奥村　それをやるなら私立では絶対ダメです。ドイツのハンブルグに州立のホテル学校があります。私の仕事を手伝ったのが成績の1番と2番の学生です。石毛さんが〝かつらむき〟をやらせたらスーッとむいてしまった。それで石毛さんが「お前、教えるの上手だな」と言うと「違う。この子達は基礎訓練が徹底しているだからなのだ」と。それは学校の教育が素晴らしいということです。

——ヨーロッパの考え方というのは、それだけの大学をつくり、技術者をつくると、いつの日か完全に国にプラスになるというのがあるからです。それは10年かかるか。20年かかるかわからないけれども安い投資だと。

鈴木　日本は目先だけにとらわれていますからね。〝味

覚文化〟という限り、文化というのは息が長いものです。

奥村　バラックを建ててつぶしているようなのではだめです。ヨーロッパのように石を積みあげていかないと。スペインのバルセロナでは、ガウディが手掛けた聖家族教会の建設が続いていますが、完成までにあと何百年かかるかわからない。積み重ねていくというのは素晴らしい文化だと思いましたね。日本はそこまでのものがないと思います。せめて神戸くらいが息の長い文化を創造して欲しい。食べるということは永遠に続くということですから。人が集まりお金が舞うところでないと食文化というのは高揚しませんから。

鈴木　芝居は観客が育てるというなら、食文化も、それを支える底辺が広がっていかないといけない。本物を育てていくように神戸市民の底辺が広がっていかないと。神戸にとって一番必要なのは、もともといろんな文化を輸入して神戸独自の役割を果たしたように、神戸にいけば、世界の国のいろんな民族のしかも一流の味が楽しめる、というような定評ができるということと、日本のもっている味文化を世界にわかってもらうことです。クァラルンプールに竹葉亭があります。去年そこへ行くと純粋に現地の人がその料理を楽しんでいる。現地向きにアレンジしているんじゃないんですね。だから自分達の料理文化はこれですと、それを皆さんが感性を乗りこえて味わって下さいと、それがわかりだすといいですね。そして日本の味覚文化が世界にむけて発信しないといけないという気がします。

奥村　神戸はちょっと日本料理が弱いですね。これからだと思います。世界の料理、食品が集まっています。逆に発進していくための食の文化を育てないと。

鈴木　それが今の大学なんかにもかかわっています。養成していく、本物の文化を。そして栽培するようなものを外へ出す。これこそ長い目でやらないといけないし〝すぐやらない　といけないと思いますね。

奥村　幸い、明治以降海外の文化を吸収して、欧風化の土壌ができ、そちらの方は花咲いたと思うんです。そういうものの基盤があって、その上に日本料理を花咲かせれば非常にインターナショナルなものができる。単なる京料理のような雅びなものでなく、ドラマ性のある日本料理のようなものもできると思います。

鈴木　日本料理のうまさを生かしてインターナショナルにするというのは、それは神戸がいいんじゃないですか。グルメの活動キャンペーンなんかもそういうところへいって新しい方向へ向いていくといいと思いますね。

――関西国際空港もできます。すると海外から関西へやって来る人の数がぐんと増える。

鈴木　だから、それを神戸にひっぱるようにしないといけないですね。おいしいものを食べたかったら神戸に来なさいと。新空港ができると神戸の役割がだいぶかわってくると思います。そして神戸というと〝酒文化〟と合体させたものがもう少しあってもいいと思いますね。

奥村　神戸に、世界に誇る日本酒の生産地ですから、兵庫県は酒と料理についてもっと研究してほしいですね。京都の女酒、灘の男酒といいますが、灘の酒というのは本来は料理と共に生きた酒なんですね。で、その中でもう一度古酒を見直さないといけませんね。

鈴木　灘の中でも、小さな酒屋さんですが昔ながらの本吟醸酒を必死でつくっているところがあるんですよ。生産量は少ないんですけれども、あの本吟醸酒の冷やが何というかな真髄みたいな、香がとてもいいんです。8度ですーっと管理しているといい香りがするんだそうです。酒も文化ですからね。それを守っているところを皆が応援し理解してあげることが重要ですね。グルメ時代になってきた時にワインが食前食後いろいろあるように日本酒もこれが食後酒ですよというものがでないと工夫が足りないと思います。食前酒、食後酒同じものを飲ませていてはダメですね。そういうところからみるとインターナショナルな時代になってきた時に酒づくりの人達

も努力してもらわないと。

奥村　海外に認められる為にはゲップ酒はダメですね。やっぱり日本料理には日本酒です。風土の中に育ってきたものですから、酒をつくる人は料理の勉強をしないといけないし、料理をつくる人は酒の勉強をしないとだめですね。

鈴木　両方相乗的にね。酒は料理をおいしくし、料理は酒をおいしくしと。そういう形でいかないとね。

奥村　それと一升瓶は頂けませんね。今どきの冷蔵庫に入らないです。吟醸酒など大へんですよ。今小家族になっているわけですから。はやく消費してしまわないといけないですから。それと水といえば、神戸ウォーターといって外国の船員さんに人気があったものですが。

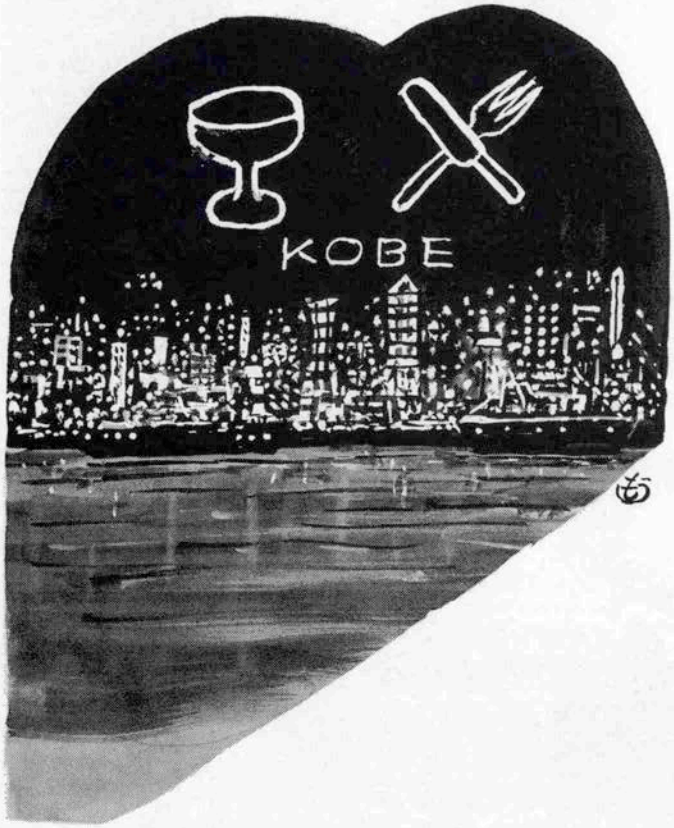
鈴木　神戸市民が神戸ウォーターを知らないというのは残念ですね。六甲山系の水をとらないという。それは以前から不満に思っているんです。グルメ都市を宣言するなら神戸にいて神戸ウォーターを飲めないというのではダメだと思います。せめて観光客が来て食事をする時に淀川の臭い水を飲ませていてはいけませんよ。これにはある程度お金を使っても、市民がみな納得すると思うんですが。

奥村　水は高いものだと思ってもらわないとね。

鈴木　ミクロネシアのヤップ島へ行ったら、そこで「六甲のおいしい水」を売っているんです。笑いましたよ。

奥村　ファッション都市宣言もいいけれど文化都市宣言をしないといけませんね。

（栄彌にて）



神戸の市章を変えよう　マンガ・高橋　孟